

## 海外の登山

## ナンガパルパット登頂

北村俊之

1998年6～8月にかけて、パキスタンのナンガパルパット（以下ナンガと略称）に遠征し、西壁（ディアミール壁）キンスホファルトを経て、8月5日に登頂した。単独での遠征だったが、ルート工作は他隊（韓国隊、イタリア隊、コロンビア隊）と協力して行い、オーソドックスな極地法で上部キャンプを伸ばした。1回目の単独でのアタックを断念し、2回目のアタックは他隊と合同で行ったが、私だけ体調を崩して失敗。他隊が成功し引きあげたため、3回目のアタックを1人で行い、やっと登頂できた。以下に遠征の概要を述べる。

## 1. 日本出発まで

当初の計画では、単独遠征ではなく、友人と2人で登る予定であった。私は、他隊に加わって同じくナンガ西壁の単独登攀を目指す棚橋君と共に、トレーニングのため5月にネパール入りしていた。ところが、メラピークとクスムカングールの登山を無事終えてカトマンズに帰着するや、友人から体調の悪化のため、今夏の遠征を取りやめたいと告げられた。パキスタン入国予定日まで、残り1週間しか無い。パキスタンの登山規制では、遠征を延期する事もできず、私に残された選択肢は、遠征を中止し、払込済の登山料約百万円をあきらめるか、1人でも遠征を決行するかしかなかった。

今までの高所登山で細胞が破壊され、回転が鈍くなっている脳を必死に働かせて計算する。まず1人だけの遠征でも、登頂の可能性は十分あると考えた。第1に、予定ルートを私自身1993年夏に7,200mの最終キャンプまで登っており、知識が十分にあること。第2にルート工作については、友人を含む韓国隊の他数隊が同時期に入山することがわかっており、他隊と協力すればなんとかなる。第3に、私はヒマラヤの単独は初めてだが、この7年間で6回の8千m峰を含め、14回高峰登山を行い、高所経験がそれなりにあり、また国内だけではあるが、冬期を中心に毎年10本程度は、単独登攀を行ってきたので、技術的・精神的にも大丈夫だろう。

しかし金銭的問題は、より深刻だった。まずカトマンズから電話して、友人の韓国隊と形式上1つの隊にして、登山料を分割できないかと図ったが、残念ながらもわずかに1週間前に、彼等は独自に登山許可を取得しており、この案は実らなかった。BCで使用するテントは友人から借り、予約していたハイポーターも断った。有力な登山団体に属さず、スポンサーも後援会も持たぬ私は、これまで全ての遠征を自己資金で行ってきた。ヒマラヤ遠征とは言え、所詮遊びなので当然の事だが、今回の様に出発直前に予算が当初の2倍近くにハネ上がってしまったのは、本当に困った。必要最小限の装備を購入するにもコッヘル1つ買うのに、1時間も悩んでしまう始末だった。結局、初めて山に行くのに親の援助を受けることになった。それも終生私の登山に反対していた、父の遺産からである。何とも情け

## 1. 登山記録

ない気持ちだったが、とにかく出発できることになった。出発前に単独で行く事を告げたのは、母と留守本部を頼んだ所属山岳会の会長だけであった。

## 2. 入山～前半戦

日本での準備を済ませ、予定より遅れて6月15日パキスタンに入る。現地エージェントの助けを借りて、当地での諸手続、準備を済ませ6月19日にイスラマバードを出発するが、ネパールからずっと続く忙しさに、体は大分まいっていた。(この時の疲労が、後に病気への感染・発病の遠因となった。)6月21日にキャラバンを開始し、6月24日に無事BCに着く。既に韓国、イタリア、コロンビアの各隊が立派なBCを作っており、そこに現れた我が隊は、私とコック、リエゾン・オフィサーの3名だけ。キッチン兼食堂兼倉庫は、ブルーシート2枚で小屋掛けしただけで、そのみずぼらしさは際立っていた。

さっそく韓国隊にあいさつに行くと、友人たちは、ルート工作も登頂もぜひ一緒にと言ってくれた。今回私は、「単独登攀」や「単独登頂」などのタイトルにはこだわらず、登頂して無事BCに降りてこれればそれで成功と思っていたので、ありがたく申し出を受ける。6月27日C1(5,200m)設置、ディアミール壁の最も急峻な部分を抜けて、7月1日C2(6,200m)設置と、天候不順ながら、他隊と共に順調にハイキャンプを進め、7月10日にはC3(6,800m)を作った。うまく行けばこのままアタックしようと、7月12日にC3に入るが、天候が不安定で、C3上部の雪壁も予想以上に状態が悪かったため、翌日約7,000m地点にデポすると、一気にBCまで降りた。この間、BCには5年前にナンガ遠征を共にした友人、大宮秀樹君を隊長とする日本隊が入っており、登録上そのメンバーの一員となっている棚橋君にも再会し、久し振りに日本語の会話を楽しむことができた。

3日間をBCで休養した後、7月17日より2回目のアタックに入る。今度は、韓国隊、イタリア隊とも合同のアタックだ。翌日はC1より一気にC3に入る。テントを既に移動していた為だが、一気に1,600m登るのはけっこうなアルバイトである上、C2より上部は吹雪の中だった。7月19日はC3で休養、しかしこの時、体に変調をきたしていると感じた。カゼだと思っていたが、実はこの時に、キャラバン中に体内に入ったA型肝炎ウイルスにより、急性肝炎が発病していたのだ。

7月20日他隊と共にC4を目指すが、私は体調が非常に悪く、皆に2時間位遅れてようやくC4(7,300m)に入った。この日、今シーズン初の登頂がイタリア隊により成された。翌早朝、他隊はアタックに出て行くが、私はC4に留まり様子を見る。この日アタックした韓国隊、イギリス隊(イタリア隊にジョイントしていた)は深いラッセルに苦しみ、日没寸前の18時頃登頂したが、帰路は闇の中ルートを誤り、2人が途中でピバーク。残りの5名は、彼等のコールを聞いて私が点したヘッドランプの明りを頼りに、夜中の1時過ぎに帰幕した。私は翌朝4時過ぎに単身頂上アタックに向かったが、7,400mで体調不十分の為撤退を決め、テント・食糧・ガスなど若干の装備をC4に残して、一気にBCまで下降した。

## 3. 療養・再起そして登頂

BCまでなんとか降りたものの、私の体調は最悪だった。体温39℃、食欲も全く無い。BC唯一のイタリア人医師は肺水腫だろうと言い、強力な抗生物質を渡された。しかし実際には、この時既に全身黄疸が広がり、明らかに肝炎の症状を示していた。だが知識を持たぬ私は、とにかく高度を下げ休養した方が良かろうと、コックと共に最寄りの村まで一旦降りることにした。満身に歩けないので、馬に乗って下山した。そして村で休養中の7月26日、私はトランシーバーで大宮君滑落死の悲報を聞いた。棚橋君以外のメンバーは、遠征を中止し、帰国すると言う。私は何も手伝うこともできず、ヘリコプターが遺体搬出するのを見送るばかりだった。

間もなく体調も回復し、BCに戻り、日程はギリギリだが、7月31日より最後のアタックを試みることにした。しかしこの時も黄疸は出たまま、小便はこげ茶色で大便は白っぽくなっており、知らぬとは言えアタックに出たのは全く無謀であった。31日早朝、1日でC2に入るべく、張り切ってBCを出発したが、氷河入口にデポしておいたアイゼン・ピッケルが盗まれており、2時間もたらず戻って来るようになった。盗人がわかるはずも無く、仕方なくアイゼンは自分の予備を使い、ピッケルは何人かのリエゾンオフィサーの装備の中で、一番ましな物を貸してもらった。結局この日は気持ちしてC1泊まりとなり、大宮隊の残置テントに泊めてもらった。

翌日C2を目指すが体調は悪く、これまでで最悪の10時間半かかって、ようやくたどり着く。前日C1で一緒だったアメリカ隊は、最後にBCに入りした隊だがスピードが有り、6時間程でC2に着いていた。8月2日C3に入る。この日から全く周囲に他隊がおらず、一人きりになる。体調は幾分良くなったが、C2よりテントを含め大荷物を運ぶのでバテる。おまけに、C3のデポ品が完全に雪に埋まってしまい、目印もわからず、1時間以上穴掘りに費やす。8月3日C4に向かう。フィクスロープは雪に埋まり、掘り出すのに一苦勞。また、フィクス終了点よりC4までの長い雪田では、ヒザ位のラッセルを延々と繰り返す。前日同様バテてしまう。そこで日程が非常に厳しくなるが、翌日は休養、ルート偵察とし、8月5日をアタック日と決める。

5日午前1時20分に出発。闇の中良く締まった雪壁を、最初は順調に進む。目指すルートは、頂上台座の真中からやや右寄りの頂稜へと、大きなクロワールをつないで登る、最近では最もポピュラーなルートである。クロワールに入るとやはり雪は深く、傾斜も有るので、胸のつかえる苦しいラッセルとなる。6時頃夜明けとなり、BCと交信して、現在位置を確認する。ラッセルを避け、右手の岩場に移るが、逆層の上もろく、再び雪壁に追いやられる。やがてガスに包まれ視界が悪くなり、クロワールは細くなり曲がりくねって、上部の見通しは効かなくなる。ここからが本当に長く感じたが、ようやくクロワールが尽きて稜上に上がると、頂上はもう目と鼻の先だった。午後1時半頃上着。C4より12時間を要した。BCと交信し、「証拠写真」を何枚もとるが、頂上を包む雲は滞電しており、立ち上がると被電して体にシビレが走る。やむなく座ったまま、頂上付近の地形や昨年登頂したチベッ

## 1. 登山記録

ト隊の残したタルチョの残骸を撮った後、すぐ下山を開始した。

### 4. 生還

下山はどんどん濃くなるガスの中、ひたすら登路をクライムダウンして行った。休める場所もなく、疲労が蓄積する中、登路と違うルートに入り、下に向かって大きく左方向に迂回して下るべき所を、急峻なクロワールを真っ直ぐに降りたが、後に自分の位置感覚を狂わせる原因となり、失敗だった。間もなく夜となり、ガスに包まれた闇の中、辛抱強くクライムダウンを続けた。やがて高度計でトラバース開始地点7,500m付近に来たと判断した私は、クロワールを離れ、右下方にトラバースを始めたが、位置判断に自信が持てず、8時頃小さなシュルトを掘り広げて半雪洞とし、ビバークに入った。天気は良くなかったが暖かく、高度も7,400m近くまで降りていたので不安は無く、ザックに腰掛けてウトウトしていた。

ふと目覚めると、外は星空になっており、あわてて下降を再開するが、自分の位置が、まだ予想外に高い事に気付く。それから、ガスに包まれると停止、晴れると行動再開でC4に近づいて行き、何度目かの晴れ間に予想外の近さでC4を発見したが、小さなセラックに間を阻まれていた。素直に登り返して迂回すれば良かったのだが、私はあせりの為判断を誤り、手持ちの道具で懸垂下降することにした。氷が柔らかいので、アイスクリュージューだけでは不安で、アイスバイル、ピッケルも使って支点を作り、翌朝回収することにして50mロープを固定した。下降してすぐは、70度程の軟雪壁だったが、少し行くとその先はオーバーハングしており、下の雪面まで10m程、完全な空中懸垂となる。まずいと思ったが、最早戻ることもできず、できるだけ素早く降りようと試みたが、空中に飛び出て間もなく支点が次々に抜け、私の体は7~8m落下し、下の雪面にあお向けに着地して止まった。手足に異状は無かったが、胸に激痛が走り、肋骨を痛めたことがわかる。テントまで残り50mをようやく歩き、中に転がり込むと、既に夜中の2時近くであり、まる24時間のアタックとなっていた。

翌日天候は地吹雪となり、体の疲労、胸の痛みもあるので停滞とする。8月7日弱まった風の中、C3へ向かう。C4テントは残置し、棚橋君に使ってもらうことにしたが、寝袋などそれなりに荷物があり、ラッセル軽減の為、例の雪原ではザックをソリの様に引いて進むが、昨日の強風で雪が締まり、案に固定ロープ末端に着けた。C3で、アタックに上がってきた棚橋君とスペイン隊に再会し、祝福を受けるとホッとした。C3の私のテントとC2の棚橋君のテントを、交換して使用し荷揚げすることにしたので、私は軽い荷のまま下山して、この日はC2泊まり。そして翌日、C1でリエゾンオフィサーの出迎えを受けて、フラフラになってBCに帰着した。日程に余裕が無いので8月10日帰路キャラバン開始、8月12日イスラマバード着。痛み止めの注射を打って8月14日帰国の途についた。そして日本で医師の診断を受けるや即入院と決まり、10月末まで長い入院生活を送ることになったのである。

振り返って見ると、今回の遠征は、突然1人で行くことになり、途中で病気になったこともあり、

## 1. 登山記録

非常に苦しいものになってしまった。実は出発前には、これまでの自分の遠征中で最も高い70~80%の確率で登頂でき、それももっと短時間で片づけられるだろうと踏んでいたのだが、ギリギリの登頂となり、それがあせりを呼んで、アタック時の数々のミスを引き起こした。生きて帰って来れたのは、幸運だったからに他ならない。

「単独」であった事については、今回は私は「孤独」による辛さよりも、「自由」である快適さ、楽しさをより強く感じた。実際、本当に自由な登山をしたいのなら、どんな登山団体とも何の関わりも持たず、登ることに何の名誉も金銭も求めず、登った事実さえ誰にも知らせないと決めた方が、良いのかも知れない。正直な話、私には、「単独、アルパインスタイル」など、いわゆる先鋭的登山のテーマにこだわる気持ちは無く、またそれだけの実力も無い。登山のスタイルについては、その時々で自分が面白いと感じ、満足できる登り方ができれば、それで良い。私にとってもっと重要なのは、良い仲間と自由な山行を続けていくことなのだ。この遠征を終えて、改めてそう思った。

(富山登攀クラブ)